

集団疎開

町田市 白山 堯（仲町三丁目疎開）



私が、高田に初めて着いたのは、昭和二十年三月十二日だったと思う。

駅前の広場は、踏み固められていたけれど、雪が二階の屋根と同じ高さまで積もっていた。

その時、私は七歳で集団疎開学童の最年少でした。ですから記憶も途切れ途切れです。

高田にお世話になった集団疎開の学校は、東京都葛飾区の学校で、私達の金町小学校は「安根（やすね）」旅館、植木屋、森屋の三旅館に分宿していました。

私達の教室は、大手町小学校に間借りしていました。

「安根（やすね）」から学校までの道は、二階の屋根の上を歩くわけですから、一般の家からは二階の窓から、昇ってくる階段がついていました。

地上の道は雁木しかなく、向う側に移るには、雪のトンネルを使っていました。

雪がとけますと、「安根（やすね）」から妙高が綺麗に見え、時には望郷の念に

かられもしました。

南葉山のへの遠足では、スキー伝来の地と聞いて感心もし、暑かったことが今でも思い出される。

戦争が激化するに伴って、高田よりもっと安全な所に移そうとしたのか、夏になった時、更に疎開することになって高志村に移った。宿はお寺でしたが、残念ながら名前がどうしても出て来ない。機会を作ってもう一度訪れたい。

八月十五日、炎天下、聞きとれない玉音放送を高志小学校の校庭で聞いた時、足が靴の中のノミにやられ、気が遠くなる程かゆかった。

大学に入学した時、六十名のクラスで、内藤君、米持君と二人も高田出身者がいたので珍しくも、懐かしく感じた。

近頃は、年に一度両君とお会いする機会があるので、高田が身近に思える。